

おいしだ ものがたり

最上川の流れとともに...



鈴木貞次郎、日本人移民へのまなざし

「偉人」と聞くと、どんな姿を想像しますか。「青雲の大志を抱き、努力を重ねて物事を成し遂げる」といったところでしょうか。伝記等の物語としては良いのかもしれませんが、これでは現実の私たちとあまりにかけ離れているような気がします。大石町出身の偉人、「ブラジル移民の父」と呼ばれた鈴木貞次郎はどうだったのでしょうか。

貞次郎が南米へ渡ったのは明治38年(1905)のことで、当初目指していたのはブラジルではなく、チリでの硝石採掘を目的にしていました。貞次郎の頭の中には、清らかなチチカカ湖(ペルーとボリビアの国境)、滔々と流れるアマゾン河(流域にチリは含まれず)等があったといえますから、とりあえず目的はあるものの、南米的イメージを膨らませているうちに、なんとなくチリにでも行っ

てみようかと思いついた、というのが本当のところだったのではないかと思います。

横浜ーペルー間の直行便グレンファーク号、そこに乗り合わせたのが移民会社社長の水野龍でした。水野はコーヒー農園の現地調査とブラジル政府との移民交渉のためにブラジルへ向かっており、貞次郎にしきりにブラジル行きを勧めます。水野にしてみれば移民のサンプルとして日本人を連れていきたくったところに、同じ南米チリまでのビザを持った青年は安上がりでもあり、最適だったのです。そのような思惑を知らない貞次郎は、純粋にブラジル移民への夢に感じ入り、即刻行き先をブラジルへと変更してしまいます。二人で共に現地視察を行った後、貞次郎は独りコーヒー園の労働生活に入りました。

はじめは感心にも、重労働を自ら買って出ている貞次郎でしたが、農場での仕事は想像以上のものでした。一月も経たずに疲労困ぱいし、根を上げてしまいます。また、出される食事は彼の旺盛な食欲を満たしてはくれず、夜な夜な隣町までバナナを買いに行かなければならませんでした。そんな貞次郎青年の心にあるものは、彼に続く日本人移民たちの生活への憂慮などであるはずはなく、日に日に心許なくなる懷に、バナナを買えなくなったらどうしようという即物的な懊惱(おうのう)でした。しかしこの哀れな青年の名誉のために加えておこなうならば、この時貞次郎は日本政府から高給を受けている見学生だと勘違いされており、経営者からは、ほんの僅かな給料しか支払われておりませんでした。また、水野らと行った現地視察では良い部分しか見せられず、現実の農場での労働環境は過酷なものだったのです。そんな状況を改善しようにも、周りに日本人の同胞もあらず現地の言葉も不十分な彼にとって、できることといえば水野への電報で切々と訴えることだけでした。

そんな中であって、貞次郎は少しずつ仕事に馴染んでいき、しだいに頭角を現します。自らの覚書として書いた広大なコーヒー園の地図が主人の目に留まったことをきっかけに農場の事務方へ回され、そこからさらに書記に昇進し支配人の右腕として信頼されるようになっていきました。その業務の合間に、移民生活の実態や各国の移民の状況を調べては、水野へ報告しています。この頃から、来るべき日本人移民の生活へ思いを馳せるようになっていきます。

貞次郎が感じていたのは、ブラジルで成功するには長期的な視野が必要であるということでした。当時日本ではブラジルへの移民希望者を募るために高待遇を喧伝しており、希望者のほとんどは数年間ブラジルで労働すれば大金を貯めて帰国できるものと思っていました。しかし貞次郎の見限り、奴隷時代の旧弊が根強く残るブラジルでの労働はそう楽観できるものではなかったのです。雇用主の意識が旧来のままなため労働者の扱いもまた奴隷並、なにより労働者から富を吸い上げ、雇用主だけが独占するシステムがそのまま残っていました。このような中では、移民会社が言うような成功など得られるはずもなく、一日も早く独立して経営主としてブラジルに永住するつもりでなければ失敗する

だろうと貞次郎は考えていました。この考えはその後ずっと貞次郎の中にあり続けます。この思想のもと、貞次郎は移民収容所書記として働きながら、日本人移民の地位の向上のために活動していきました。時には共に歟をとりながら、常に移民のそばにありました。これは、政府から派遣された役人や移民会社の立場ではなく、一労働者として得られた見地であったと思います。



第11号移民を乗せた笠戸丸

貞次郎は学生時代は虹原、ブラジル渡航後は南樹と号し、短歌や俳句を詠む風流人の一面を持っていました。学生の頃は根岸の正岡子規を訪ね短歌や俳句の指導を受けていました。また子規門下の河東碧梧桐や高濱虚子らの句会にも参加し、たびたび上位に選ばれています。この縁で鈴木貞次郎著『伯国日本移民の草分』の扉題字は碧梧桐が揮毫しています。

子規・碧梧桐らの俳句や大石田の俳諧の歴史を展示した「みちしるべの行方～大石田の俳諧・俳句活動の足跡～」は12月3日(日)まで、大石町立歴史民俗資料館で開催しています。

歴史民俗資料館 特別展88

「みちしるべの行方
～大石田の俳諧・俳句活動の足跡～」
展示期間：12月3日(日)まで
10月28日、29日は入場無料です。

■大石町立歴史民俗資料館
☎35-3440

大石田そば街道

おSOBAに珈琲

～100年の歴史を越えて～

大石田町産来迎寺在来×ブラジルコーヒー 「おSOBAに珈琲」の販売が始まります！

10月28日(土)・29日(日)、新そばまつり会場にて販売します

大石田そば街道振興会が「銀座カフェパウリスタ」(東京都)の協力を得て開発を進めてきた、大石田町産そば来迎寺在来とブラジルコーヒーのブレンドコーヒー「おSOBAに珈琲」が完成しました。町の特産品そばを活用した新たな名物として、そば店などで販売が始まります。



大石田町と ブラジルコーヒーの深い関わり

「おSOBAに珈琲」開発のきっかけは、ともにブラジルへ渡った大石田町海谷出身の「ブラジル移民の父」鈴木貞次郎と、カフェー銀座パウリスタ初代社長、水野龍との縁にあります。

鈴木貞次郎は明治38年(1905)、南米チリ行きの船に乗り、そこで乗り合わせた水野龍と意気投合、行先をブラジルへと変更します。その後は日本移民の見本となるべく、サンパウロ州のコーヒー園で就労し、明治41年(1908)には日本契約移民800名を乗せた「笠戸丸」を出迎えました。サンパウロ市移民収容所の書記となつて、それ以降も日本からやってくる移民の世話をするなどして、ブラジル移民定着の土台を築いていきました。

およそ100年前に2人が夢見たブラジルコーヒーと、同じころ大石田に土着した来迎寺在来の時を越えた出会いをテーマに、大石田そば街道振興会は昨年「銀座カフェーパウリスタ」(東京都)の協力で大石



7月の「三街道そばの里まつり」でも試飲を実施。多くの方から「おいしい」と好評を得ました。

田オリジナルのブレンドコーヒーの開発を進めてきました。
振興会では発売に向け、昨年の新そばまつりで訪れた方にそばとコーヒーの比率を変えた3種類のコーヒーを試飲してもらいアンケートを集めたほか、今年の5月からはそば街道加盟店など試飲期間として提供それらの意見をもとに来迎寺在来種に焙煎を加え、カフェーパウリスタ担当者が厳選したブラジルコーヒー豆とブレンドし、蕎麦と珈琲、お互いの香りを邪魔せず引き立てあう、大石田オリジナルのそばブレンドコーヒーが完成しました。
そばコーヒーは10月28日(土)以降、そば街道加盟店など町内15店舗で提供されます。お土産品としての販売、メニューとしての提供など店舗により提供方法や開始時期が異なりますので、詳細は町公式ホームページをご覧ください。